

## ミャンマー・ドキュメンタリー上演と監督による質疑応答

報告 土佐桂子

〈総合文化研究所の主催・共催で開いたイベント〉

「ミャンマー・ドキュメンタリー上演と監督による質疑応答」

(総合文化研究所・ビルマ語教室共催)

監督：キンマーマーチー (Dr. Khin Mar Mar Kyi) : オックス  
フォード大学アウンサンスーチャー・ジェンダー研究フェロー)

タイトル：“Dreams of Dutiful Daughters: Inspirational life stories of Burmese women in Thailand” (六十分)

日時：六月二十九日四時限

場所：二三四号室

監督のキンマーマーチー氏はミャンマーの研究者であり、活動家である。民主化運動に参加後、オーストラリアに亡命、オーストラリア国立大学で人類学、ジェンダー研究等を学び博士号を取得する。オーストラリアでは Excellence in Gender Research 賞等多数の賞を受賞し、現在オックスフォード大学のアウンサンスーチャー・ジェンダー研究フェローを務める。今回はアジア国際学会でキンマーマーチー氏と同じパネルに参加したご縁で、来日の際に本学で同フィルムを上演していただくことになった。

舞台はミャンマーとの国境に近いタイのターク県メーソート

で、ミャンマーからの出稼ぎ者が多数集まる場所でもある。彼女は、博士論文のための調査をここでを行い、六百人以上の女性にインタビューを行った。家事労働や工場労働従事者のほか、性産業従事者も多数いる。性産業従事者や時には家内労働者も、絶えずHIV感染の危険に晒されており、カレン系ビルマ人が開設しているシンシア診療所では、多数の患者の治療を行ってきた。

キンマーマーチー氏は国外に出稼ぎ女性のインタビューをもとに、特にHIV/エイズ感染者のドキュメンタリーを制作することとなる。フィルムは九名のミャンマー人出稼ぎ者、NGOワーカーのインタビューを元に構成されている。彼女たちが本国でどのような境遇のもとで暮らしていたか、いかなる教育を受けてきたか、どうやって自国を離れ、異国の土地で働くようになったか、本国に残る親兄弟などにいかに送金し、支援を試みているかなど、テーマに沿って順に編集されている。都会で大学教育を受けた人間もいるが、多くは村落から人身売買組織に絡んだり時には人にだまされたりして、メーソートにやってくる。性産業に従事するなかでHIVに感染したり、エイズを発症したりする経緯が語られる。夫からHIVを移され、その後シンシア診療所でボランティアとして働く女性もい

る。人生のなかで最もつらかった思い出、楽しかった思い出、今の心境などが語られていく。

文化人類学には映像人類学という分野がある。英国ではかなり以前からグラナダテレビなどで、人類学者の協力を得て、世界各地の諸民族に関わる秀逸なドキュメンタリーが制作されてきた。また、映像人類学は文化、社会を「民族誌」的に記述する新たな表現媒体として注目されるが、書き物や書籍と同様、「編集」がもたらす、「現実」の切り取り方への関与についても多数議論がある。

キンマーマーチャー氏も膨大なフィルムの編集に頭を悩ませ、完成には数年間を費やしたという。インタビューを受けた人々は、民族的背景、宗教的背景、家族構成、教育状況、タイに来るまでの経緯もそれぞれ異なる。ただ多くの地域と同様、ミャンマー国内で性産業の従事者やHIV／エイズ患者は極めて重い意味を持ち、よりはつきり言えば無理解と蔑視の対象でもある。そうした背景やさまざまな思いから、現在家族と連絡を絶っているものも多い。キンマーマーチャー氏は彼らを、ドキュメンタリーの題名にあるように、残してきた両親や兄弟、家族たちへの送金と生活支援に、文字通り身を挺して働く女性という切り口から描くことにしたという。いずれも、過酷な、時に熾烈な人生を経ており、病床で、ほぼ横たわったまま声を振り絞るように、人生を語る女性も含まれる（ちなみに完成を待たずに亡くなったと思しき彼女への謝辞が、フィルム最後に流される）。個々の過酷な状況が見えれば見えるほど、その穏やかな語り口の対比が観るものを圧倒するといえるだろう。

このフィルムはこれまでも英国、米国、オーストラリアなど

で上映され、観客の心を揺り動かす力強い映像として高い評価を受けてきた。人生の重みが滲み出るようなフィルムは、監督が長年にわたって、彼女たちと構築した揺るぎない信頼関係の成果ともいえるだろう。フィルムについて世界各地の研究機関や女性センターなどから購入希望の問い合わせが来ているという。しかし監督は女性たちからの許可も得ており、商業路線に乗せることは支援の資金にもなりうるという理解しつつも、ミャンマー国内の状況から出演者のプライバシー確保に不安を持ち、現状では応じていない。

本学での上映には、大学院所属教員のほか、AA研の教員、研究員の方や若手研究者、さらに、学部生、大学院生など、四十名近くが参加した。音声がビルマ語、字幕が英語というところもあり、学部生にとって分かりにくいところもあったようだが、衝撃や感銘も大きかったようで、時間が終了しても、多数が監督を取り囲んで活発な議論が行われた。ちなみに、NHK国際放送局からプロデューサーとミャンマー人アウンサーも参加し、終了後監督や本学学生のインタビューが行われ、ミャンマーに配信された。また、フィルムに衝撃を受けたNHKスタッフの発案で、週末に急遽在日ミャンマー人コミュニティ内でも上映され、やはり大きな反響を呼んだという。

アウンサンスーチー政権が樹立して以降、表現の自由は格段に増加し、従来は国外でしか撮れなかった社会的テーマのドキュメンタリーや短編映画の制作も国内で増えつつある。今後期待できる分野ともいえるだろう。